



親愛なるセフレ

yokuneruko

彼と出会ったのは、私が携帯ショップで働いていた時だった。アメリカ人の彼を英語スタッフだった私に対応したのだ。彼はランゲージエクスチェンジパートナーを探していた。私も英語のレベルを上げたかったので、お互い日本語と英語を教え合おうということになった。彼はとても気さくでオープンな人であったし、私も人見知りをするタイプではないので、一度目のエクスチェンジから話が弾んだ。上辺だけの会話でなく、話を掘り下げて語り合えるだけの英語力を私が持っていることに興味を持ってくれた。また、同じ映画が好きなこと、私が着けていた腕時計が彼のお気に入りと同じブランドだったことも、私に関心を持つきっかけになったようだった。勉強の途中で、彼は私を見ながらホッと息をついた。そして、ちょっとお互いの話をしよう、と言って勉強を止めた。私達はいろんな話をし、二回目の約束をして別れた。二回目のエクスチェンジの時、彼は、「僕たちは相性がいいように思う。付き合ってみるべきだと思うけど、どうか」と言った。私も彼を意識し始めているのをどこかで感じていたので、いいよと答えた。

恋愛にのめり込むことに慎重だった私は、どこか他人事のように思うようにし、絶対浮かれたりしないぞと自分に言い聞かせていた。ところが、見るもの聞くもの全てが新鮮で会う度に興奮し、久しぶりに抱く心地よい緊張感も手伝って、彼にどんどん惹かれていった。会っていない時も彼が気になって、何とはなしにメールを打つことが多くなった。

付き合い始めて一ヶ月ほど経った頃、彼と食事に行く約束をした。私は久しぶりに会えるとウキウキしていた。最近の彼からのメールが何となく冷たく感じていたのは気のせいだったと安心して彼と食事をした。食事の後、飲みに行こうと誘われた。お店に移動中、横断歩道を渡っている時だった。喜んで隣を歩く私に、彼は「ちょっと話があるんだけど」と言った。私は、「真剣に付き合おう」という言葉が出てくると瞬間的に予想した。心が躍った。ところが、私が代わりに聞いたのは、「I'm feeling uncomfortable to be dating with you.」という言葉だった。Uncomfortableは、気分が悪い、居心地の良くない、という意味だが、今までここまで心に刺さった言葉はなかった。私とはもう付き合いたくないと言われたのだ。彼の手袋で遊んでいた私の手が止まった。私は必死に冷静さを保とうとして、「メールが素っ気無いと思ってたんだー」と言った。すると彼は、「良かった、じゃああまり傷つけずに済んだんだ」と言い、話を続けたが、その後は何も耳に入ってこなかった。彼は言いにくいことを言ってスッキリしたようで、朗らかに話を続けた。歩きながら私はもう限界だと思い、やっぱり帰ると彼に言った。彼は困ったような顔をしていた。このまま帰るには、あまりに自分が可哀想で、必死に気持ちの整理をしながら、一言、私もあなたに完全に心を許すことはできなかつたと告げた。彼は黙って聞いていた。最後に「See you later.」と言うと、そうだね、また会おう、そう言って別れようと彼は少し微笑んだ。

どん底の気持ちの帰り道、倒れそうになりながら道を歩いた。友達に電話をし、泣きながら話を聞いてもらった。次の日も別の友達に会い、慰めてもらった。彼はオーストラリア人で、外国人と日本人の感覚の違いも理解していた。アメリカ人のデートは、特定の相手と付き合うことばかりではなく、同時に気軽に複数の人と付き合うこともあるということを知り、二度目のエクステンションでそういえば聞いたような気がすると思い出していた。その友達に言われた。「人間、誰でも拒否されることが一番辛い。でも拒否する権利はどちらにもあるんだよ。」半分は納得したものの、家に帰ってからも泣き通して、次の日は目が腫れ上がっていた。暗い曲ばかりが入ったCDを何度もリピートして聞いた。一日中布団から出られなかった。次の日会社に行き無理に働くと、少しいつもの自分を取り戻した。すると、徐々に沸々と怒りが湧いてきた。たった一ヶ月で私の何が分かるというの？という疑問がぐるぐると頭の中を回った。三日目、私はリベンジの決心をした。はっきり思ったことをぶつけようと心に決めた。借りていた本があったので、彼ともう一度会う約束を取り付けた。最後に完全にエンドマークを打ちたかった私は、台詞を全て考え、何度も練習してスラスラと言えるようにした。当日仕事が終わると、きりっとした服に着替え化粧を直し、マスカラをつけ、戦闘体制に入った。彼はちょっと緊張したようなぎこちない面持ちで待っていた。私はゆっくりと幕を上げた。「私は、あなたは私のことを知る時間を十分に取ってくれるだろうと勝手に思い込んでいたけど、そうではなかった。あなたはこんな短い時間で私を判断したけど、私はそんなに単純ではないし、浅い人間でもない。私はあなたに失望した。でももうこのことについて話し合うつもりはない。終わったことだから。じゃあね。」彼に言い返す暇を与えずに一気に言い切った。呆気にとられている彼に本を付き返し、視線を後ろに感じながら、スッキリして家路についた。

一週間が経ち、私の中で気持ちが変わり始めた。自分の気持ちをストレートに伝えたことに対して後悔はしていなかったが、せっかくのいい出会いを、後味の悪いものにしてしまったと少し後悔した。そこで彼に、伝えたことについて後悔はしてないが、感謝もしている。もうわだかまりはない。あなたの今後の幸せを願っているとメールした。

それから数ヶ月して、突然彼からメールが来た。もうしばらくしたら韓国に行こうと思っている。もっと早くメールするべきだった。良かったらまたコーヒーでも飲もうと書いてあった。すぐに電話して、再会することになった。

久しぶりにオシャレをして出かけた。気分は晴れやかだった。彼は会うなり、ちょっと驚いた様子で、「今日は素敵だね。」と初めて言ってくれた。笑顔がこぼれた。空白の時間を埋めるのに時間はかからなかった。今思えば、付き合っていた頃は、彼は私の気持ちが大きくなっていくのを感じ、重くなったのだと思う。仕事で少し軽い鬱状態だったことも原因だっただろう。でもこの時の私の心の状態は全く違った。完全にふっきっていた。一緒に過ごすうち、少しずつ距離が縮まり、フワフワとした甘い時間を過ごした。

彼は韓国に行くことになっていたし、私と本格的に付き合うというスタンスではなかった。私も理解していた。彼は、また私を傷つけるのではないかと心配したが、私は他の選択肢もオープンにしておくと言ったら、安心したようだった。それから、彼氏彼女ではないけれど、お互いを尊重し、ロマンティックな関係でいようということになった。別々の道に行くこともできたけれど、私達は社会の枠に囚われず、新しい道に行くことに決めた。今まで感じたことのない、自由で伸び伸びとした恋愛だった。近いうちに、帰国した彼を訪ねることになっている。世間では一般的には一括りにセフレと呼ばれてしまうのかもしれないが、彼はいつまでも私の大切な人である。